会社員　奥山　由美

「かきくけこ」の心得と「口から食べる喜び」

一郎さま

貴重なお話をありがとうございました。
摂食嚥下障害のお話は、私自身が娘の闘病生活で感じ、体感したことでした。「食べることは生きること」を教えてくれた娘を回顧し、前のめりになって聴講させていただきました。

２年前、６歳の１人娘を小児脳幹部グリオーマで在宅医療で看取りました。
この病気は、発覚と共に症状として現れる大きな２つが嚥下障害と排尿障害です。
病状が進行し、危篤状態になった時、娘は奇跡の復活を遂げ、しゃべるまでに快復しました。しかしながら、嚥下障害は深刻を極め、経鼻経管で栄養摂取することになりました。
突然の危篤、そこからの奇跡の復活。親として、１ 日でも一緒にいたい、経口摂取にむけての間の栄養摂取をなんとかつなぎたいという気持ちを、先生と話し合って決めた処置でもありました。

娘の意志を確認してのチューブをつけましたが、つけ終わった後、娘は、あらためて、じっと先生を見つめ、「いつまでこれつけるの？」と言いました。
「まだ口から食べられないからしばらく、、１０日くらいはまずつけるかな」と先生が言いました。その瞬間、娘は、チューブを麻痺のない左手で抜き取りました。チューブは見事な弧を描き、唖然とする先生の顔が奥に見えました。

その瞬間、危篤から復活した時の息も絶え絶え、発した言葉、「マンゴージュースが飲みたい」といった娘の姿がよぎり、口から食べる喜び、「口から食べること＝生きること」だ、と気づかされ、経鼻経管をやめて、口からの摂取ができるよう工夫をする日が続きました。２週間後には、ペースト食まで食べられるようになりました。奇跡の復活がくれた１か月半のおいしそうに口から食べる娘の姿、桜吹雪をバックに刀を抜く遠山の金さんのように見えた、チューブを抜く娘の神々しい姿にはっとさせられた瞬間を思い出しました。

この大切なことを、病院のみならず、市民に向けても、様々な方面へ、「次世代へつなぐ」発信をし続けている先生の発想と行動に感服しました。
ただただ、一体どうやって時間を使っているんだろう？藤島先生は３人くらいいるんじゃないかと思わせるようなお話でした。

プロボノ、いきいきトレーナー養成事業は、浜松市のみならず、深刻な高齢化社会に必要なことで、日本全体に広がってほしいと思いました。

また、リハビリテーションの心得、「かきくけこ」藤島先生の改変版は、藤島先生そのものであり、日常生活や医療に関わる仕事でなくても必要な心得だと教えていただきました。
ありがとうございました。